

『透明人間』

【0】

【金村】

朝。

って言ってもまだ日も登ってないような時間帯だけど、いつも寒さで目を覚ます。起きてすぐに仲間の爺さん婆さん達が生きてるかどうかの確認をする。

「異常なし、異常なし。」

ちゃんと指差し確認も忘れずに。

全員生きてることを確認して、街へ繰り出す。

とにかく空き缶が多いこの街には本当に助けられてる。一個で1円、2円、3円。若いってやっぱり特権だと思う。

4円、5円、6円。

小さい時は爺ちゃん、婆ちゃんって早起きで凄えなってると思ってたけど、それはちゃんと生きてる奴らの話。

7円、8円、9円。

俺の周りはみんな、昼までは寝てるよ。10円。

そして今日も日が昇り、俺は、相棒のスケッチブックと一緒に西武東口に向かう。

俺何やってんだろ。こんなはずじゃなかったのに。なんでこうなったんだろ。何回木霊したかわからない自問自答と共に、身を潜めながら、俺なんかよりずっと偉いこの言葉を掲げる。

『食べ物をください』



【1】

【茜】

2限のチャイムが鳴ると同時に学校を飛び出す。普段はバイト目的でしか使わないけど、今日はプロダクションに所属してから初めての仕事だから。逸る気持ちを抑えながら登りのホームから電車に飛び乗り、池袋へ。

改札を出て待ち合わせ場所の西武東口の宝くじ売り場の前に、その人は居た。

『食べ物をください。』

それだけ書かれた大きなスケッチブックの陰に隠れるように、小さく小さく蹠つてた。

色あせたジーンズに、薄汚れたダウンジャケット。たぶんそうだ。てか絶対そうだ。大学で話題になってるフリップ乞食。噂では金に困れど、食うには全く事欠かないそうだ。

リアルにこんな人に食べ物を恵んであげる人なんかいるのかなと思って、そこから10分くらい視界の端っこの方で観察してやったけど、案の定、そのホームレスに手を差し伸べる人はいなかった。

悲しきかな、今日はクリスマスイブ。街を歩く人々はどこか浮き足立っていて、心なしか歩みが早い。もしこれがクリスマスなんて関係ない時期だったら、誰か一人くらいこの人のために足を止めるのかな。なんとなくそんなことを考えながら、iPhoneで時間を確認する。

12時32分。

まだ待ち合わせの時間まで大分ある。

お店に入る程時間もなし、適当にゲームでもやって時間を潰そう。そう思い、イヤホンを嵌め、掌にあるiPhoneのディスプレイに視線を落とす。

ふと気がつくのと、いつの間にかiPhoneの後ろには二本の色あせた柱が根を下ろしていた。

金村「すみません、あの、」

茜「へっ？」

金村「時間、」

茜「ふえ？」

金村「いや、あの・・・」

【茜】

フリップ乞食だ。さっきまで柱のところでまんまるくなってたフリップ乞食。いつの間に？なんで気付かなかったんだろ？てかなんで私の前に？



金村「あの、すみません。今何時か
わかりますか？」

茜「えっと、12時40分くらいです。」

金村「そうですか。ありがとうございます。
すみません、驚かせて。」

茜「え、あ、いや、そんな別に、」

加瀬「あの、」

【茜】

声の方を向くと、そこにはジャケットか
ら靴の先まで寒色でフォーマルにまとめ
た服装の男性が立っていた。

加瀬「東海林茜さんですよね？」

茜「はい。」

加瀬「どうも、お疲れ様です。加瀬織人
です。」

茜「あ、お疲れ様です。本日は宜しく
お願いします。」

加瀬「宜しくお願いします。あの、」

金村「はい。」

加瀬「この子ね、うちの大事な女優さん
なんです。すみませんが。」

金村「あ、女優さんなんですか？」

茜「あ、まあ一応。」

金村「舞台のほうですか？映像のほうで
すか？」

茜「えっと、」

加瀬「だから、近寄らないでくださいいっ
て言ってるのがわかんないんです
か？」

金村「……すみません。」

加瀬「じゃあ、行きましようか。こちら
です。」

【茜】

加瀬さんに背中を押されるように、西武
東口を出る。ドンキホーテに続く横断歩
道を渡りながら振り返ると、彼は右脚を
引き摺りながらスケチブックを持って西
口の方に歩いていった。

これは脚のせいなのかどうかわからない
けど、心なしか俯き加減で、どこか寂し
そうで、これもたぶんだけど、私と同じ
くらいの歳な気がした。

【2】

【涼】

「はいはい、喧嘩しないでくださいね。」

諍いを起こすのはいつもあの二人だ。池袋駅前公園の源さんと西武東口の北さん。お互いの何が気に入らないのか、正直ただ飯を振舞ってるこっちの身にもなってほしい。

あんたらにとってはタダかもしれないけど、私らにとってはそうじゃないんだから。

喉元まで込み上げてくる『大人』の事情を飲み込む。

大学を卒業してから3年。自分で言うのはおかしいかもしれないけど、我ながら良くやっているとと思う。資格もなし、就職経験もなしの無い無い尽くし22歳。ペーがNPO法人立ち上げて、自転車操業だけど、なんとか舵取りしてんだからさ。こんなこと口が裂けても言えないけど、一瞬でも、目の前のカレーじゃなくて、私らのこと見てくれても良いんじゃないかって。

いつもなら哲君が間に入ってくれるのになあと思いつつ、二人の元へ向かう。

【茜】

撮影スタジオに向かうまでの道中、加瀬さんからいろんな話を聞いた。現場でのノウハウや振る舞い方。加瀬さんは大きな現場に入りつつ自身でも会社を経営していること。結婚してること。そしてお子さんがいること。

歩いて10分ほど経ち、もうすぐ着くというところで、私からも一つ聞いてみた。

茜 「加瀬さん。」

加瀬 「ん？」

茜 「さっきの駅前に居た人についてなんですけど。」

加瀬 「ああ、あの乞食？」

茜 「はい。」

加瀬 「それがどうかした？」

茜 「いや、別に加瀬さんを責めるとかじゃないんですけど。」

加瀬 「うん。」

茜 「あんなに怒る必要あったかなと思っつて。」

加瀬 「俺そんなキレてた？」

茜 「まあ、若干。」

加瀬 「いや、フリだよ、フリ。」

茜 「そうですか。」

加瀬 「なにか引っかけることでも？」

茜 「いや、引っかけかかっている訳じゃないです。ただ、意外と若い人だったから、ちょっと可哀想だったかなって思いました。」

加瀬 「別にそんな可哀想じゃないよ。」

茜 「そうなんですか？」

加瀬 「根性がないだけだよ。」

茜 「はあ。」

加瀬 「俺今池袋に住んでるんだけどさ。」

あいつだいたいあそこにいんのよ。
たぶん恵んでもらうことが普通に
なってるんだろうけどさ。ふざけ
んなって感じ。どんな環境で生ま
れたって、どんな苦難があったっ
て、切り開くのは自分なんだから。」

茜 「まあ、そうですね。」

加瀬 「茜さんも今日が初仕事みたいだけ
ど、どんな小さなチャンスでも取
りこぼしちゃダメだからね。後悔
しないように。」

茜 「はい。ちなみになんですけど。」

加瀬 「うん。」

茜 「今日の撮影内容ってどういった感
じですかね？」

加瀬 「あれ？社長から聞いてない？」

茜 「一応台本は覚えてこいって言われ
たくらいなんですけど。」

加瀬 「え、そっか。聞いてないか。今日

はね、スタンドイン。」

茜 「スタンドイン??」

加瀬 「知らない？」

茜 「はい。」

加瀬 「・・・えっとね。あれだよ。あの、
本キャストさんに負担かけないた
めの現場代役みたいな感じ。」

茜 「代役ですか？」

加瀬 「うん。」

茜 「出演ってわけじゃ」

加瀬 「ない。」

茜 「記録には」

加瀬 「残らない。」

茜 「・・・」

加瀬 「えっと、大丈夫かな？」

茜 「はい。大丈夫です。理解しました。」

加瀬 「じゃあ、行こうか。」

茜 「はい。」

沈黙

【茜&加瀬】

マジかよ。

【涼】

片付けをする頃になって、哲くんが来た。相変わらずニコニコして、いつものように右足を引き摺りながら。

涼 こんにちは。

哲 こんにちは、涼さん。

涼 遅かったじゃん。

哲 すみません。もう、終わっちゃいましたよね？

涼 一食分残してあるよ。

哲 それって、僕の方だったりします？

涼 うん。

哲 いただいても良いですか？

涼 もちろん。

哲 ありがとうございます。

涼 今持つてくるから。

哲 いや、自分で取りに行きます。

涼 いいって。

哲 大丈夫です。自分で、やりますから。

涼 じゃあ、一緒に行こうか。

哲 はい。

哲君に会ったのは、ちょうど去年のこの時期。

駅周辺を夜回りしている時だった。

前夜祭だと言い、源さんを中心にささやかな酒盛りをしている池袋駅前公園に着いた時、輪の中に一人の見知らぬ青年がいた。源さんに話を聞くと、昨日ここに流れ着いたという。

別に今の彼が幸せを感じてるとは思わないけど、その時の哲くんはひどくやつれていて、そして何かを押しえ込むように、両手を強く強く握りしめていた。

そんな彼を知ってか知らずか、源さんは後継者が出来て嬉しいなんて言って、歯抜けの口を大きく開けて笑っていた。お酒が入って笑い上戸になってただけかもしれないけど、その日の戦利品のおにぎりを分け与えていた源さんを、今でも鮮明に覚えている。

涼 また駅前にいたの？

哲 まあ。

涼 この時期は連日炊き出しだってやってるんだし、そんな頑張らなくてもさ。

哲 でも、そんな涼さん達に頼り切るのも良くないと思うんで。

涼 なら前も話したけど、うちでアルバイトって形でも良いから、

哲 いや、もう少し自分で、模索してみます。もう少し、自分で。

涼 でも

哲 それに、源さん達のこともあるんで。

涼 ・ ・ ・ 哲君はまだ若いんだから。

もっと人に頼って良いんだからね。

哲 ・ ・ ・ はい。



区の調査によると、豊島区の路上生活者の数は年々減少傾向にあって、今年に入って100人を切ったらしいけど、どこを調べてるんだか。

162人。今日の参加人数だ。

オリンピックに向けて街はどんどん浄化されていき、綺麗になっていくように見えるのに、炊き出しへの参加人数は年々多くなっていく。臭いものには蓋をすって言うけど、その蓋の上で行われる平和の祭典って誰のための平和なんだろうって、最近よく考える。

カレーを食べ終えた哲君は、再び駅前に戻っていく。

もしかしたらサンタクロースのような人が現れるかもしれないと笑う彼の目は、どこか寂しそうだった。

【4】

【茜】

9時過ぎ。撮影が終わった。

加瀬さんは駅まで送ってくれようとしたけど、断った。

スタジオを出て、昼間来た道に戻る。

日はとつくに落ち、昼間は太陽に照らされてきた街は今、色とりどりのネオンに照らされ、前夜祭の真っ最中のようにだった。

加瀬さんも監督も、凄く良かったよって言うってくれたけど、何が良かったんだろう。

確かに最後に全員で見たくんに映ってたのは私だけど、きっと彼らが見てたのは私じゃなくて、明日、私がいた所とまったく同じ場所に立つ、別の女優さん。

本当の意味ではきつと、誰も私なんか見てなかっただろうな。そんなことを考えながら歩いてたらドンキに着くまで20分もかかってしまった。

横断歩道を渡る。酔っ払いや客引き、様々な人間でゴった返す西武東口に到着し、歩いている最中、『食べ物をご覧ください』

の言葉が視界に入ってくる。色あせたジーンズに薄汚れたダウンジャケット。

私に気が付くかなと思ったけど、彼は昼間と全く同じ場所で、同じように小さく蹲り、五感を固く閉ざしていた。

彼はどうしてこんなことをしてるんだろう。

そう思いながら、人の波に流されて、改札を通り、片道30分の満員の下り電車へ。

考えなきやいけないこと、考えちゃうこと色々あるけど、とりあえず今は帰って、眠りたい。

明日は朝からバイトだ。また、池袋。

スマホゲームをやってる化粧の濃いおばさん、手首だけでつり革にぶら下がってるおじさん、イヤホンがシャカシャカうるさいDQN。たくさんのお知らせ人たちと共に、家のある所沢を目指す。



【加瀬】

日付が変わって少し。監督やスタッフさんが全員帰宅したことを確認して、スタジオを出る。

正直、監督がこだわりを持っていると予定通りにいかないから迷惑だ。今日は早く帰れるはずだったのに。

携帯を確認する。5時間前に妻に送った

LINEはまだ既読にならない。

西武東口から西口の方へ抜ける。

『食べ物ください』

こんなクズ、俺の人生には無関係だと自分に言い聞かせるけど、どうしてもこいつを見る度に無意味な憤りを抑えることが出来ない。

食べ物をくださいだ？ふざけんな。食いもんが欲しいなら働け。納税もしてねえクズが。なんで俯いてんだよ？何で顔隠してんだよ？周り見てみるよ。みんな働いている。見るからに頭の悪そうなキャバ嬢だって、禿げたおっさんだって。

お前みたいな社会の被害者ですみたいな雰囲気醸し出してる奴が一番嫌いなんだよ。みんな生きるために働いてるんだ。こいつだって、こいつだってこいつだってこいつだって、俺だって。

家族や社員喰わせるために、必死で。

このクソ乞食が。

加瀬 ただいま。

沈黙が返事をする。

リビングはいつものように散らかり、テーブルに俺への食事と思しきものは何一つない。

冷蔵庫を開ける。納豆に、卵に、牛乳。男の一人暮らしじゃあるまいしき。そう思いながら納豆と卵を取り出す。

妻 帰ってきたんだ。

加瀬 ただいま。かすみ。

妻 うん。

加瀬 あの子の具合は？

妻 あの子って……。

加瀬 いや、ごめん。昇は？

妻 昨日よりはって感じ。

加瀬 熱は？

妻 1度10分。

加瀬 病院は？

妻 行った。

加瀬 ご飯は？

妻 食べさせたよ。なに？私が何もやってないと思ってるの？

加瀬 そんなこと言っていないだろ。

妻 そりゃ部屋は散らかってるし、買い出しだって今日も出来なかったよ？でもあの子のことでサボったことなんてない。朝から晩までちゃんと面倒見てるし。

加瀬 わかっているって。

妻 何がわかっているの？

加瀬 お前だって頑張ってるってこと。

妻 ……最近、私が昇の世話してる
ところ見たことある？

加瀬 え？

妻 おり君、昇の寝顔以外見たことある？

加瀬 ……ごめんな。

妻 おり君は良いよね。外に自由に行けて。

加瀬 仕事だから、しょうがないだろ。

妻 明日は？

加瀬 朝から。

妻 帰りは？

加瀬 明日は早く帰れると

妻 本当に？

加瀬 ……いや、ごめん。もしかしたら。

妻 寝る。

いつからこうなったんだろう。一生守る。

昔言った言葉に嘘はないし、昇が生まれ
てからはなおの事そう思った。でも、俺、
そう言えば幸せにしてやるって、一回も
言ったことないかも。

今、俺は二人に幸せにしてやるって胸を
張って言えるかな？

もし『幸せ』って商品があるなら、10万
でも、100万でも、1000万でも。いくら
でも出す。いくらでも。

いや、何考えてんだ、俺。

どこまでも小さくなって行く頭を切り替
えようと、テレビに向かう。

加瀬 ごめんな……。

テレビの横には、綺麗に飾り付けられた
小さなクリスマスツリーが立っていた。

加瀬 はあ……。

なんで俯いてんだ？何で顔隠してんだ
よ？ なあ……、なあ？

【金村】

キーキーという甲高い音を立てながら、
シャッターが降りて行く。スケッチブツ
クを片手に源さん達のいる駅前公園へ。

やっぱりサンタクロースは現れなかった。
最初から期待なんかしてないんだけど。

『サンタなんかいない。』

一体いつのことだったかは定かじゃな
いけど、俺を見下ろしながらそう言った
親父の姿は、今でもはつきり思い出せる。
超が付くほど現実主義者のあの人は俺に
金と自分以外のモノを信じさせなかった。

『金は絶対裏切らない。』

『自分のことは自分でなんとかしろ。』

あの人の過去に何があったかは知らな
いけど、酒に酔う度、疍を巻いて話して
いた。

だから、っていうのもおかしいかもし
れないけど、きっと「だから」だ。俳優
なんて夢を抱いたのは。



進路相談でも「自分のことは自分でなんとかしろ」と言われた俺は、高校卒業と同時に、バイトで貯めた100万を握りしめ、深夜バスに飛び乗った。

住む場所、仕事先、養成所と全てがトントン拍子に決まっていた東京生活。

『親父、こっちは順調だ。自分のことは自分でやってる。バイト先では店長の右腕。劇団ではこの間、同期の中のリーダーになってくれて制作の人から言われたよ。来月、正団員になれるかの審査がある。20人いる中で、5人しか通らない狭き門だけど、仲良くしてる先輩からは、お前なら大丈夫だって。正団員になったら六本木にあるデカイ劇場に立てるんだ。舞台だけじゃない。うちの劇団はテレビとか他の業界にも繋がってるから、きっとそっちにも、』

親父「それで？」

金村「・・・え？」

親父「お前今、それで食べてんのか？」

金村「いや・・・」。

親父「あっそう。」

俺はその日、久しぶりの休みを使って倉庫整理の派遣バイトに行った。

こういう仕事は何回か経験あったし、体力にも自信があったから特に問題なく業務をこなし、終了一時間前。

気が付くと俺は、病院のベッドに横たわっていた。違和感を感じ右脚を見てみると、太ももからふくらはぎにかけて固くギブスで固定されていた。

右膝蓋骨折。つまり、膝の皿が割れたってこと。医者は、何か重い物が落ちてきた衝撃でそうなったって言ってたけど、原因は不明らしい。目撃者は誰も居なかったって。グループで動いてたんだ。そんなはずない。そう思っただけに派遣会社で電話して確認してもらったけど、その日に参加したメンバーはみんな知らないの一点張りだそうだ。

そこから2ヶ月、入院とリハビリを繰り返した。その間に正団員の審査は終わり、バイト先はクビ。そこからは早かった。上京時に持って来た100万なんてとっくに無かった俺は、すぐに首が回らなくなって、養成所、仕事、ついには住居まで無くしてしまった。

何回も親父に連絡しようと思ったけど、そのたびにあの時の親父の言葉が浮かんでくる。

親父『自分のことは自分でなんとかしろ。』



金村『親父、こっちは順調だ。自分のことは自分でやってる。バイト先では店長の右腕。劇団ではこの間、同期の中のリーダーになってくれてって制作の人から言われたよ。来月、正団員になれるかの審査がある。20人いる中で4、5人しか通らない狭き門だけど、仲良くしてる先輩からは、お前なら大丈夫だって。正団員になったら六本木にあるデカイ劇場に立てるんだ。舞台だけじゃない。うちの劇団はテレビとか他の業界にも繋がってるから、きつとそっちにも・・・。』

親父「それで？」

金村「・・・」

親父「お前今、それで食べてんのか？」

金村「・・・」

親父「あっそう。」

結局、一回も連絡出来なかった。

『あっそう。』

それ以来、親父の声を聞いてない。

哲「すみません。なんでここに？」

涼「夜回り。」

哲「ああ。すみません。」

涼「なんで謝るの？」

哲「いや・・・」

涼「サンタは？来てくれた？」

哲「いや、見ての通り。」

涼「そっか。こんな時間まで大変だったね。もしかして、明日も？」

哲「はい。」

涼「そうか。じゃあ、はい。哲君にも。」

涼さんが渡してくれたのは使い捨てのカイロだった。

涼「朝方冷えるらしいから、風邪引かないように。」

哲「ありがとうございます。」

涼「それじゃあ、私行くわ。明日も

同じ時間だから、遅れないように

ね。」

哲「はい。」

涼「それじゃあ、また明日。」

哲「・・・あの、」

涼「ん？」

哲「涼さんって、なんでそんな、僕み

たいなのに良くしてくれるんです

か？」

涼「・・・哲君みたいなのって？」

哲「金も、家もなくて、自分のこと自

分で出来なくて、人から蔑まれる

ような」

涼「頭が固くて、意地っ張りな人？」

池袋駅前公園。

源さんを中心に行われている前夜祭に、

涼さんの姿があった。

涼「こんばんは。」

哲「こんばんは、涼さん。」

涼「遅かったじゃん。」



「・・・え？」

「なんで良くするかって、はっきり言っちゃうと仕事だから。自分でこれって決めた仕事だからよ。でもね、私だって自分のこと全部自分で出来てるわけじゃないんだよ？今日みたいな炊き出しだって、会社の事務作業だって私生活だって。私結構馬鹿だからさ。仲間やボランティアの人達が居なかったら、もうとっくの昔に会社畳んでるもん。」

「・・・。」

「哲君がどういう考えを持ってるかなんてわかんないけどさ、別に自分一人で立つだけが自立じゃないと思うんだよね。哲君だって、私の自立の手助けしてくれてるじゃん。」

「そうですかね？」

「うん。」

「・・・。」

「別に無理に何かを頼らなくて良いからさ。少しでも良いから顔上げてみなよ。」

「はい。」

「じゃあ、またね。明日はサンタ、来ると良いね。」

「・・・もう、今日ですかね。」

「そっか。それじゃあ。」

涼さんを見送った後、戦利品がないことをみんなに謝る。

お酒が入って笑い上戸になってるだけかもしれないけど、源さんはそんなこともあるさなんて言って、歯抜けの口を大きく開けて笑っていた。

一緒に飲まないかという誘いを断り、自分の段ボールの中に入る。

いつまでもこんなこと続けているわけにはいかないけど、でも・・・。

いや、わからない。とりあえず明日に備えて身体を休めよう。

夢の中にくらいサンタは出て来てくれるかな。別に、最初から期待なんかしてないけど。期待なんか・・・。

いつからだろう。常に地面を見るようになったのは。



【茜、加瀬、涼】
朝。

【金村】

日が昇り、今日も相棒のスケッチブックと一緒に西武東口に向かい、掲げる。

【加瀬、金村】

『食べ物ください』

【茜】

「クリスマスケーキはいかがですか？」

12月25日。クリスマス。

普段は汗ばんでしまう程蒸している駅地下も、今日は心なしか肌寒い。

今朝の西武東口。バイト先へ向かう道中、白い息を吐きながら行き交う人々で姿は見えなかったけど、見え隠れする先に大きなスケッチブックが見えた。

「クリスマスケーキはいかがですか？」

白い制服に大きな看板を携え、声をかけ続けて、かれこれ2時間。道ゆく人たちは私にもくれず通り過ぎて行く。

そりゃそうだよ。深夜のお惣菜コーナーじゃあるまいし、賞味期限ギリギリのホールケーキを好き好んで買う人が多いわけない。そんなことは社員さんだって、店長だって、メーカーだって、みんなわかっている。みんな、少しでもお金を稼いで、自分が捨てるゴミを減らしたいだけ。

「クリスマスケーキはいかがですか？」
時々こっちを見る人もいたけど、その視線は私じゃなくて、私の頭の上にある看板に向いていた。昨日の撮影を思い出す。目の前にいるのは私なのに。目の前にいるはずの私はあくまで視界に入っているだけの付属品で、記憶に残るのは私以外の何か。・・・スケッチブックの彼も、もしかしたらこんな気持ちなのかな。
何考えてんだ私。
すると突然、店長から休憩に入ってと声をかけられた。

【加瀬】

飯休憩の前に、それまでに撮ったカットを再度確認した。大手が売り出しているのかなんだか知らないけど、正直昨日入った茜さんの方が全然良かった。まだ監督とは話してないけど、あの煮え切らない表情を見る限り、監督も同じことを思っているんだろう。

全員に弁当を配り終わり、ようやく飯にありつく。食べている最中、今朝のことを思い出す。

案の定、あの乞食はいた。
いつもと同じ場所で同じように掲げられていた言葉。もはや条件反射のように湧き出て来る憤りは次の一步を踏み出すのと同時に、驚きに変わった。

普段は固く閉ざされているはずの殻が開き、表情を覗かせていた。

その男は不安げな表情をしつつも、何かに耐えるように交錯する人々の向こう側を見据えていた。
何かあったのかな？
いや、何考えてんだ、俺。
あの乞食が俺にとって全くの無関係な存在であることには変わりはない。

【茜】

急な欠員で10時〜10時のシフトになってしまった今日の休憩は1時間以上もある。普段ならキヨスクで適当に買って休憩室って流れだけど、たまには外のお店にでも食べに行こうかな。私は西武東口に通じる階段を昇る。宝くじ売り場の前。当然いると思っていたその人は、スケッチブックと共にいなくなっていた。

【涼】

「はいはい、喧嘩しないでくださいね。
昨日したばかりじゃないですか。」
今日も私が二人の間に入る。
今日の参加人数は昨日よりも少し多い169人。その中に哲君の姿はなかった。源さんが西武東口を通った時には、もう既に居なかったらしい。
遅れないようにと釘を刺したはずなのに。どこをほっつき歩いているのかは知らないけど、昨日のこともあるから念のため、170食目をタッパーに入れて、脇に寄せる。

【茜】

サンシャイン通りのカフェレストラン。大人に子供、男性、女性、カップル、家族連れ。食後のコーヒーを飲みながら窓の外を往來する人達を眺める。本当にたくさんの方がいる。
私がこうしてぼんやり暇を持て余してる今も、スタジオでは本役の女優さんが撮影してるんだろうな。

【加瀬】

ふと目を向けると、監督が不機嫌そうにタバコを吸いに外へ向かった。
あの監督のことだから、どうせ予定通りにはいかないんだろうけど、今日はなるべく、早く帰りたい。

【茜】

綺麗な人、可愛い人、脚が長い人に脚を引き擦ってる人。手には大きなスケッチブック・・・彼だ。目線で追ってはみたけど、こっちに気がつく様子もない。私は手に持ったコーヒーカップをテーブルに置き、立ち上がる。会計を済ませ、急いで外に出てみるが、もう姿は見えなかった。別に何をしたいわけでもなかったんだけど、ただなんとなく。

【涼】

参加者が全員いなくなり、片付けが終わる頃になっても、哲君は現れなかった。気になって駅前公園と西武東口を廻って見たけど、彼の姿は見当たらなかった。



別に大丈夫だとは思うけど、こんなことは今までなかったという源さんの言葉に少し不安になる。

【加瀬】
彼が戻って来たらすぐに始められるよう、作業に戻る。

【涼】
夜回りの時にまた来ることにして、事務処理のためオフィスに戻る。

【茜】
あと五分で休憩が終わるから、仕方なく、バイトに戻る。

【金村】
ほんの少しだけ、前を見て進んでみた。

息が白く成る程寒かった朝の西武東口。

同じ場所で同じ言葉を掲げた俺は、いつもと少し違うことをした。

地面を踏みしめ通り過ぎていく人間の脚。人が増えるにつれ恐ろしくなって目を閉じようとした時、不意に感じた視線に顔を上げる。

昨日の男だった。一瞬目が合ったと思っただけど、なぜか驚いた顔をして通り過ぎていった。

驚いた。顔を上げた先には俺を気にせず歩き続ける人々が大勢いた。

どの人も、それぞれの目的地を見据えて。いつもと同じように立ち上がった俺は、いつもと違うことをした。

自由のきかない右脚を引き摺って、目の前の人の波に入る。流れは俺を受け入れて新たな形を作り、流れ続けた。

そのまま流れに身を任せて、サンシャイン通りへ。

細かく枝分かれしたり、その先で合流したり。それらはどれも必ず言葉を交わしていた。

本当にたくさんの方がいる。

大人に子供、男性、女性、カップル、そして家族連れ……。

たぶん幼稚園の時、家族が3人だった時のことを思い出す。怪我をしたあの時、もしお母さんがいたなら、俺はちゃんと連絡してたのかな。母さんならなんて言うてくれただろう。

いつもと同じように右脚を引き擦りながら、いつもと違う場所にその脚を運んだ。サンシャイン通りを抜けて、254を渡り、住宅街の細い道に。奥には中学校があり、校庭では生徒がサッカーをしていた。上京する直前に結婚した親友はどうしてるかな。



ちゃんとおめでどうを言っつてやりたかった。

【6】

目を向けると向かいの道路に親父と同じくらいの白髪のおじさん。親父、元気がな。今の俺に親父はなんて言うかな。俺は親父になんて言えるかな。

そのまま真っ直ぐ。車通りの多い向こう側の道路を目標に、脚を動かす。

真っ直ぐ続く明治通りに、平行する空。

日は緩く傾いていて、暖かい光が体を包む。

そのまま真っ直ぐ。空き缶を探してるわけでも、目的地があるわけでもないんだけど、ただなんとなく、小さな目標を作り、歩く。

【加瀬】

10時。撮影を終え、スタジオを出る。

昨日より2時間も早いと言えは聞こえは良いが、やっぱり予定通りにはいかなかった。監督や女優に憤りを感じながらも、もう自分には関係ないと言いつき聞かせ、急ぎ足で池袋駅を目指す。

西武東口に到着し、西口に向かおうとした時、今朝と同じ場所にあの乞食がいた。

もし明日もそれが書いてあったら、あいつに声をかけてみよう。

そんなことを考えながら、地下に通じる階段を降りる。

【茜】

ケーキは、結局売れ残った。

私を含めて、その日働いていたメンバーで分ける。私だけホール2個。理由を聞くと最年少で実家暮らしだからって。

あと2時間もしないでクリスマスは終わってしまう。

階段に差し掛かった時、偶然加瀬さんに出くわした。挨拶をするや否や、どうしたの？って。

そりゃ両手に特大サイズのケーキの箱を持ってれば、誰だってそう聞く。

一個いりませんかと言うと、加瀬さんは嬉しそうにもらってくれた。一人でこんなに食べるんですか？と聞くと、照れながら妻と子供に。



加瀬さんに挨拶をして、階段を登る。
人でごった返す西武東口。改札に急ぐ人の合間から、柱に座り込むその人の姿が見えた。

昨日、加瀬さんと待ち合わせをしていた場所に立つ。

昨日と同じ色あせたジーンズに、薄汚れたダウンジャケット。そして大きなスケッチブック。

『食べ物をご覧ください。』

茜 「すみません、あの……」

金村 「へっ？」

茜 「いや、あの……」

金村 「え、あ、昨日の、」

茜 「覚えてます？」

金村 「はい。」

茜 「ありがとうございます。」

金村 「なんでしょうか？」

茜 「あの、もしよかったらこれ。」

金村 「え、これって、」

茜 「クリスマスケーキです。私、地下のケーキ屋さんで働いてて。」

金村 「ありがとうございます。」

茜 「いえ、余りものなんです。」

金村 「いや、嬉しいです。」

茜 「よかったです。あの、これって、私が話すって言うのでも……？」

金村 「はい。もちろん。」

茜 「じゃあ、聞いてもらって、いいですか？」

金村 「はい。」

【涼】

夜回りの最中、西武東口をのぞいて見た。いつもの場所に哲君はいた。ホッと胸を撫で下ろし、近寄ろうとした時、向かい側に立っていた女の子が哲君に歩み寄る。横に置いてあるスケッチブックを見ると、いつもの言葉の下に別の言葉が小さく書かれていた。

『お話をさせてください。』

幕

【登場人物】

- ・ 金村 哲 (21歳) 〓池袋駅前公園を寝ぐらにしているホームレス。ホームレス仲間の食料調達係をしている。
- ・ 東海林 茜 (21歳) 〓都内の芸術系大学に通う女子大学生。池袋駅の洋菓子屋でバイトしている。
- ・ 間宮 涼 (25歳) 〓NPO法人「TEITSUNAGI (てつなぎ)」代表。池袋を中心に、ホームレスへの炊き出しなどの支援を行なっている。
- ・ 加瀬 織人 (27歳) 〓株式会社「オアシス」代表取締役。主に映像作品の制作として働いている。